世紀転換期における南部とC. W. チェスナット
――*The Marrow of Tradition* を中心として

中　村　久　男

1

フォークナー（William Faulkner）が経済的理由もあって、ハリウッドに滞在し映画の脚本に関わる仕事をしていた時、彼は自作の小説『アブサロム、アブサロム！』（*Absalom, Absalom!*）をもとに白人と黒人の通婚(miscegenation) をテーマとする映画脚本を書いた。これを目にしたワーナーブラザーズのプロデューサーのひとりは、ひどい思いつきのストーリーだ、映画化不可能と書き付けてその脚本をただちにフォークナーに送り返してしまった。[1]　これが1943年のこと。しかも人種差別の激しいアメリカ南部ではなく、西海岸のカリフォルニア州の映画の都ハリウッドでの話である。これよりもおよそ40年前、20世紀初頭にひとりのアフリカ系アメリカ人が人種問題を直視する三冊の長編小説を書いてのち、忽然と文学界から姿を消した。彼の名はチャールズ・W・チェスナット（Charles Waddell Chesnutt)。[2]　彼については、日本では紹介される機会が少ないので、その経歴を記しておく。

チェスナットは1858年オハイオ州クリーブランドで生まれた。両親は南北戦争前の混乱を避けノース・キャロライナ州からオハイオ州に移り住んでいたのである。南北戦争後、一家は再びノース・キャロライナ州フェイエットヴィルへと戻り、チェスナットは25才までそこで過ごすこととなる。彼の生い立ちで特徴的なのは、両親が奴隷解放がなされる以前からの自由黒人であり、彼自身は８分の１だけ黒人の血をひくいわゆるオクトロンで、その外見は白人としても通用するほどであったことである。彼は南北戦争後の南部再建期（1867-77）の黒人への教育が熱心におこなわれた時代に教育を受け、

「言語文化」2-2：197－214ページ　1999.
同志社大学言語文化学会 ©中村久男

さらに彼自身も熱心に個人教授に就いてラテン語、ギリシャ語、フランス語、ドイツ語を学び、ピアノも弾き、教会ではオルガニストとして演奏するほどの腕前であった。彼の早熟ぶりは経歴をみれば明らかである。14歳で母校ハワードスクールの時間講師、18才でシャーロットの公立学校の校長、19才でフェイエットヴィルに創られた黒人の教員養成のための学校ノーマル・スクール（the New State Colored Normal School）の教員、22才でその校長に任命されている。20才で結婚し、ふたりの娘をもうける。このように順調な経歴を送りながらも、彼は文学を愛し、作家になることを密かに願っていた。1881年３月26日の日記にサッカレーの『虚栄の市』（*Vanity Fair*）を読んで、「いい小説を読めばいつも小説を書いてみたくなる。ぼくの生涯の夢は作家になること。」[3]と書き記している。

教職は自分の求めている生きがいではないという思いや、子供たちには自分が受けることを許されなかった社会的知的環境を与えてやりたいとの思いがつのり、次第に南部に倦怠を感じるようになる。特技として速記も習得していたので、一分間に200語の速記が可能になった1883年、あえて安定した生活を捨て、速記で身を立てるべく単身ニューヨークへと向かう。彼が日記に記した言葉によれば、彼が切望したのは「文明であり、平等」であった。（*Journals*, 172）

チェスナットはニューヨークでダウ・ジョーンズ社の速記の職をえるが、この大都会は娘たちを育てるにふさわしい環境ではないと判断し、半年ほどでニューヨークをあとにする。その後オハイ州クリーブランドに移り、鉄鋼王カーネギーが出資していたニッケル・プレート鉄道社の会計として雇われ、翌年には家族を呼び寄せる。その後、速記の才を活かせる法律部門に配属されるが、これが彼のその後を決定する職への道を開くことになる。その職と並行して、判事のもとで法律を学び、1887年３月にはオハイオ州の司法試験に合格する。翌年彼は法廷速記者として法律事務所を開くことになる。

法廷速記者としての仕事を続けながらも、作家になる夢は抑えがたく、彼は仕事のかたわら短編小説の創作に励むこととなる。作家になりたいという彼の夢が正夢となる様相を見せ始める。後に *The Conjure Woman*（1899）に収録されることとなる “The Goophered Grapevine” が1887年８月に、88年４月

には “Po’ Sandy” が相ついで『アトランティック・マンスリー』誌（*Atlantic Monthly*）に掲載され、*The Silent South*（1885）を出版して黒人問題に理解を示していたジョージ・ワシントン・ケーブル（George Washington Cable）に注目されることになる。チェスナットは権威ある著名な全国誌に短編が掲載された最初のアフリカ系アメリカ人作家としての栄誉を担うことになったが、ケーブルは、チェスナットが88年の暮れに彼に会いに来て、自ら黒人であることを明かすまでは彼が黒人であるとは思わなかったという。さらに98年に “The Wife of His Youth” が『アトランティック・マンスリー』誌に掲載されたのを機に、99年に短編集 *The Conjure Woman*、*The Wife of His Youth and Other Stories of the Color Line*、フレデリック・ダグラスの伝記 *Frederick Douglas* を相次いで出版して 好評を博した。これら一連の作品によって文壇からの注目を集め、時の文壇の大御所ウィリアム・ディーン・ハウェルズ（William Dean Howells）等の知遇をえることになる。同年９月には長年の夢であった著述業に専心することを決意して法律事務所をたたむ。

しかし、1900年の初の長編小説 *The House Behind the Cedars*、翌年の長編小説 *The Marrow of Tradition* は短編小説ほどの好評をえることはできず、本の売れゆきも芳ばしくなく、結局1901年には法廷速記業を再開せざるえなくなっている。そして1905年の長編小説 *The Colonel’s Dream* で復活を試みるがうまくいかず、文壇からは身を引くことになる。その後は対立する立場をとるふたりの黒人指導者、ブッカー・T・ワシントン（Booker T. Washington）とデュボイス（W. E. B. DuBois）、この両者との関係を保ちながら、さまざまな場面で黒人問題について発言し、尽力し、28年に全米黒人地位向上協会（The National Association for the Advancement of Colored People: NAAC P）からその顕著な功績に対してスピンガーン・メダルを授与されている。彼は小説家としてはその活動期間も短く、不遇ではあったが、一市民としては功なり名を遂げて1932年11月に亡くなっている。

こうして小説家としてのチェスナットはほとんど忘れ去られた存在となるが、その業績が再評価され出すのは、公民権運動の高まりを受け、白人男性作家を主体として編まれたアメリカ文学史の見直しがおこなわれ、女性や非白人作家たちへ光が当てられ出した1960年代になってからのことである。こ

の小論では、作家としての経歴を絶たれる直接の原因となったと考えられる長編小説第二作である *The Marrow of Tradition* を取り上げ、この小説がはらむ問題をその当時の社会情勢を絡めて検討する。

2

チェスナットは1900年10月のブッカー・T.・ワシントンへの手紙で *The House Behind the Ceders* に次ぐ作品、すなわち *The Marrow of Tradition* の主題は「まさに今日的なものとなるだろうし、黒人の生きる権利（the negro's right to live）」を扱うだろうと述べている。[4] 前作の *The House Behind the Ceders* は白人と変わらない外見をもつ黒人が白人社会に潜り込む、いわゆるパッシング（passing）を扱った物語で、パッシングに成功して立派な弁護士となった兄が、同じく白人としてもとおる妹をパッシングさせようとして失敗し、彼女は悲劇的な死を迎えるという物語である。12月の手紙では、人種問題について白人向けの本を書くことの難しさは承知でもう一冊、主に白人に向けて同じ路線の本を書くつもりであること、これまでの作品よりも広い視野から単純ではあるが生き生きとした筋書で人種問題の状況を描くつもりであること、また、現在の人種問題の解決策を提唱するには自分は微力ではあるが、人種問題の不満の所在を指摘して、『アンクルトムの小屋』（*Uncle Tom's Cabin*）のような波紋を呼ぶような作品を書ければよいのだがと述べている（*Letters*, 156)。この二通の手紙から、*The Marrow of Tradition* が対象とする読者は主に白人であること、この小説が人種問題について問題を提議し、人種問題の改善を目的としていること、それゆえ、多くの読者が理解できるようにわかりやすい作品とすること、といった作者の意図が窺える。

The Marrow of Tradition[5] は白人の父を同じくする白人の姉オリヴィア(Olivia)と八分の一黒人の血をひく異母妹ジャネット（Janet)、それにオリヴィアの白人の夫カータレット少佐（Major Carteret）とジャネットの黒人の夫ミラー医師（Dr. William Miller）という二組の夫婦を中心として愛憎取り混ぜメロドラマチックに展開される。

オリヴィアとジャネットは知らぬひとが見れば双子かと見まがうほどよく

似ており（*MT*, 8）、ジャネットの肌の色は白人に近いものであるが、二人の前には超えられぬ人種の壁が高くそびえている。オリヴィアの夫カータレット少佐は旧家の出身であるがその家は南北戦争後に没落し、屋敷はジャネットの夫の裕福な父が買い取り今はジャネット夫妻がそこに住んでいる。カータレット少佐の現在の広大な屋敷は妻オリヴィアのものである。しかし、オリヴィアの遺産相続には秘密が隠されていた。オリヴィアの父マークネル氏（Mr. Merknell, Mars Sam）の妹、オーケルツリー夫人（Mrs. Polly Ochiltree）が彼の死に際し、遺言書を奪い隠し、オリヴィアに全財産が遺譲されるように工作したのであった。だが、実際にはマークネル氏はオリヴィアの母の死後、黒人のジュリア・ブラウン（Julia Brown）と正式に再婚し、その結婚証書も正式に作成していたのであったが、世間体を恐れ公表できないままに臨終の時を迎えたのであった。彼はそのことを悔い、ジュリアとその娘ジャネットへの遺産譲渡を遺言したのであった。オリヴィアはオーケルツリー夫人が不慮の死を遂げてのちにこのことを知るが、この秘密は再び隠蔽されてしまう。オリヴィアの夫は黒人種を劣等で卑屈な人種（*MT*, 25）と呼び捨てる白人優越主義者で、彼の “Morning Chronicle” という新聞社を興す元手も彼女の財産に依存していたのである。そして、この新聞での扇動が黒人の公民権剥奪を標榜する白人たちを人種暴動へと駆り立てることとなる。ジャネットの息子はこの暴動で幼い命を落とす。一方、この暴動の最中、発作を起したオリヴィアの病弱な息子の命を救うことができるのはミラー医師だけで、オリヴィアの息子の救命をミラー医師に許すか否かの判断はオリヴィアに黒人として疎んじられ、その夫カータレットの引き起こした暴動で息子の命を奪われたジャネットに委ねられるという究極の状況へと物語は突き進むこととなる。

3

この物語の背景となった南北戦争後から20世紀初頭にかけてのアメリカ南部の社会情勢を概観すれば、南北戦争の勝者である北部による南部再建政策が黒人の地位を向上させ、政界への進出をも可能とさせはしたが、再建期を過ぎてからの南部に残されたものは、その反動としての過剰なまでの黒人へ

の差別であった。1865年の憲法修正13条での黒人の自由の確認、68年の憲法修正14条での黒人の市民権の承認、さらに70年の憲法修正15条による黒人の選挙権の承認と、立て続けに憲法上の国民としての認定や権利保証がなされ、黒人にとって有利な方向に世の中の流れは進んでいるようにみえた。しかし、実際にはその反動として65年にはデラウェアー州で分離教育が行われだし、その他の南部諸州がそれに追随する。68年には黒人への暴力的差別行為をおこなうクー・クラックス・クラン（KKK）や白薔薇騎士団をはじめとする秘密結社が組織され、黒人に対するリンチ事件が1880年代から20世紀初頭にかけて多発することになる。1877年に連邦軍による南部占領が終わると、それまでの白人たちの不満が噴出するようにジム・クロー法と呼ばれる黒人差別の法律が現われ始める。81年にはテネシー州で黒人と白人の乗る車両を区別するジム・クロー・カーが初めて採用され、83年には州権を憲法14条よりも優先させることが最高裁で認められる。これによって、特に南部諸州では巧妙に黒人を差別する法律が制定されることになる。また、選挙権も税金の支払や人格テストや読み書きテストによって制限が加えられる。さらに南部諸州では祖父条項（grandfather clause）が設けられる。これは1867年に祖父または父が選挙権を有していれば引き続き選挙権有資格者とするという条項である。しかし、1867年が黒人の市民権を認めた憲法修正14条が施行された年よりも１年前であることを知れば、いかにうまく黒人が選挙から排除されたかがわかるであろう。さらに、止めを刺すように、1896年最高裁が「分離すれども平等（separate but equal）」という有名な判決を出す。これは、八分の一黒人の血をひくホーマー・プレッシー（Homer Plessy）が白人専用列車に乗り、みずから黒人であると宣言しルイジアナ州の州法違反で逮捕され、裁判に持ち込んだプレッシー事件に対する判決であるが、1954年までこの判決は覆えされることなく、黒人たちは白人社会から分離されることになる。このような黒人への合法的排除規定に加え、経済的にはシェアクロッパー制と呼ばれる小作制度によって黒人の生活は決して好転することはなく社会の底辺に暮らすものが多かったのがその当時の状況であり、作者チェスナットや彼が描くミラー医師のような社会的地位の高い富裕な黒人層は実際にはごく少数であったと言えよう。

The Marrow of Tradition はこのような20世紀への転換期のアメリカ南部の社会情勢を捉えかつそれを色濃く反映している。ミラー医師がフィラデルフィアからの帰途に乗る列車でのエピソードがプレッシー事件への揶揄を込めて描かれている。彼は医学校での恩師、バーンズ博士（Dr. Burns）に列車で出会う。バーンズ博士はカータレット少佐の息子の喉の切開手術に向かっていたのである。この場面で作者はこの二人の医師がもっている洗練された紳士としての同質性と人種という外見だけの相違を強調して描いている。

> Looking at these two men *with the American eye*, the differences would perhaps be the more striking, or at least the more immediately apparent, for the first was white and the second black, or, more correctly speaking, brown; it was even a light brown, but both his swarthy complexion and his curly hair revealed what has been described *in the laws of some of our states* as a "visible admixture" of African blood. [italics mine] (*MT*, 49)

アメリカ人にとっては個々人の人格よりも白人か黒人かという目に見える人種の違いがいかに大きな問題であるか、また法律という名のもとにいかに恣意的に人種が決定されているかを明瞭に述べている。やがて列車が南部ヴァージニア州に入ると車掌はミラー医師をバーンズ医師の召使とみなし白人専用車両（White）に乗っているのを見逃すが、ミラー医師が召使ではないことがわかると白人専用車両への黒人だけでの乗車を禁じたヴァージニア州の法律に従って黒人専用車両（Colored）に移るように要求する。このような恣意的な法律を作り上げたのは慣習であり、*The House Behind the Ceders* の白人判事の言葉を借りれば、「慣習は法律よりも強い」[6] のであり、恣意的な法律がさらに慣習を強化するという悪循環を生みだしていくのである。

黒人奴隷というかつての白人の所有物に過ぎなかった存在が、憲法上市民として認定され、さらに投票権まで与えられるとなると、白人側からは白人優越主義を死守しようとして、黒人の投票を阻止しようとする動きが活発になる。黒人の公民権剥奪のためのキャンペーンが単なる黒人への脅しにとどまることなく悲惨な暴動へと変質してゆくことはままあり、この小説ではノ

ースキャロライナのウィルミントン（Wilmington、小説ではウェリントン、Wellington）で実際にあった白人が仕掛けた人種暴動に取材して描いている。小説における暴動の仕掛け人はカータレット少佐、かつてのプランテーション主で今は弁護士であるベルモント将軍（General Belmont）、それに新興成金のマクベイン（Captain McBane）の三人である。カータレット少佐は自分が生まれた屋敷に黒人であるジャネットとミラー医師が住んでいることに憤りを感じているし、白人種よりも劣った人種に支配されたくないと公言して憚らない。州知事さらには上院議員への野望をもつベルモント将軍は黒人弁護士によって職域が侵されていくのを恐れている。マクベインは貧農出身で黒人たちの社会進出を快く思ってはいない。カータレット少佐とベルモント将軍は古き良き南部の過去を引きずる旧支配者階級であるが、その彼らが奴隷と同様に蔑んでいた貧乏白人からの成り上がり者のマクベインと徒党を組まねばならない事態に直面しているのであり、彼らは黒人の公民権を剥奪し、白人優越主義を堅持していくということに関しては利害が一致するのである。

語り手はこのような白人優越主義を “great steal”（*MT*, 241）と言い放つ。カータレットの黒人の遣い走りジェリー（Jerry）に対する言葉がそのレトリックの良い例である。

> “Jerry,” said Carteret sternly, “when I hired you to work for the Chronicle, you were black. The word ‘negro’ means ‘black.’ The best negro is a black negro, of the pure type, as it came from the hand of God. If you wish to get along well with the white people, the blacker you are the better, –white people do not like negroes who want to be white. A man should be content to remain as God made him and where God placed him. . . .” (*MT*, 245-46)

ジェリーはカータレットにうまく丸め込まれ、おとなしく白人の言うなりになって投票に行かなければ現在の職を失わなくて済むと思い込まされるのである。カータレットは神の名を騙り、良き白人主人と忠実な黒人下僕という構図のなかで、まんまとジェリーの人間としての権利をかすめ取るのであ

る。

旧支配者階級に属すもののなかにも黒人を守ろうとする人物は存在している。デラマー氏（Mr. Delamere）がその人である。彼はオーケルツリー殺害の嫌疑で逮捕された自分の召使サンディー（Sandy）を救うためアリバイを偽証する。なぜなら、「南部では不可解な事件が起きるといつも真っ先に黒人が疑われる．．．黒人たちは浪費、窃盗、不道徳に対して何世代にも亘って慣らされているのだから．．．その数に比例して犯罪を犯す可能性があるのは当然。この町の少なくとも三分の二は黒人だから、証拠がない時には犯罪を犯したのが黒人である割合は二対一である」（*MT*, 178 - 79）という白人側の「論理的根拠」によって黒人は犯人に仕立て上げられ、リンチによって故なき裁きを受ける可能性が高いからであり、住民の尊敬を集めるデラマー氏の言葉のほか黒人の被疑者を救う手段がなかったからである。デラマー氏の孫トム（Tom）への疑いをもちながらもそれをデラマー氏に告げることのできないサンディーの忠義心、一方デラマー氏のサンディーは決してそのような犯罪を犯すような者ではないという確信、このふたりの関係にはプランテーション主とその忠実な奴隷というページ（Nelson Page）をはじめとする南部白人作家たちが南北戦争後繰り返し描いた古き良き南部を懐かしむ典型的主従関係が繰り返されている。

デラマー氏の尽力によってサンディーは救われる。しかし、作者は、真犯人はこの老南部紳士の孫トムであるという皮肉なプロットを用意する。トムは賭けトランプの借金返済に迫られて、黒人に変装して犯行におよんだのである。[7]　この事は公にされることはないが、この皮肉な真実を知ったデラマー氏は深い悲しみのなかで寂しく人生を終える。この件についての作者の関心はそれ以上展開することはなく、トムへの追及もないままに事件はうやむやにされてしまう。作者はデラマー氏の死によって南部紳士の伝統の終焉を暗示するとともに、トムを真犯人として描くことによって、旧南部支配者階級に属す白人の退廃と凋落を象徴させている。デラマー氏の封建的家父長的態度や黒人の保護者としての考えだけではもはや新南部の移ろい行く社会や人間関係には対処しきれないのである。

このような白人による家父長制の庇護から抜け出しえない黒人たちに対し

ても作者は厳しい裁断を下す。カータレットの庇護のもと安泰に暮らすことを選んだジェリーは、暴動に巻き込まれ、心ならずも黒人陣営に取り込まれてしまう。挙句にカータレットの姿を認めて白旗を掲げ彼に助けを求め走り出たところを白人暴徒に射殺されるのである。

また、オリヴィアの忠実な黒人の乳母マミー・ジェーン（Mammy Jane）もこの暴動で殺されてしまう。ジェリーやマミー・ジェーンは白人の主人に対して忠実な下僕であることを当然とする古いタイプの黒人世代（old-time negroes、*MT*, 42）に属している。彼女はオリヴィアの息子に不幸な痣があるのをみつけると、こっそりと呪術師に祈祷を願うような古いタイプの黒人女性として描かれている。マミー・ジェーンやジェリーのような白人から与えられた役割に忠実で、それから抜け出しえない典型的な黒人像に対して作者は否定的であり、それはまた同時に、白人作家たちが描く忠実な下僕としての白人から与えられたイメージに満足している黒人像に対する異議申し立てともなっているのである。

白人の言いなりになるジェリーと対照されるのは、白人に対し雄々しく戦いを挑んでいく若き闘士ジョシュ・グリーン（Josh Green）である。彼は十才のときに父を KKK に虐殺され、母はそれがもとで精神に異常をきたした不幸を背負っている。このような事情によって彼は白人に対して憎しみを抱いており、復讐の機会を窺っている。彼は白人の仕掛けた暴動に仲間とともに戦いを挑んでいく。しかし、作者はジョシュを白人側の急進派マクベインと相打ちさせ彼にも死を与えている。「暴力を行使するものは暴力を受ける」（*MT*, 309) と述べて、「目には目を」的な人種問題解決にも否定的な見解を示している。チェスナットは非暴力による人種問題解決を願っているのである。

白人の下僕としての旧来の典型的黒人像が配置される一方で新しい黒人像も提示されている。若い黒人世代（the younger generation of colored people、*MT*, 42）の一典型はオリヴィアの息子の面倒をみている看護婦によって示される。彼女にとって看護婦としての仕事はビジネスであり、お金と交換に時間を売るだけの関係で、カータレット家は彼女にわずかな給料を与えてくれるだけなのだから、それと等価のサービスをすればよいし、両者の間には愛などという問題は存在しない（*MT*, 42）という割り切り方をしている。しか

し、彼女ですら、「古いものと新しいもの、人種と人種、奴隷と自由とが完全には混じりあってはいない」（*MT*, 42）中途半端な世代に属しているのである。

このようなドライな黒人の若い世代を描いているのに加え、この小説には、これ以前のアメリカ小説では無視されていた黒人の中流階級が描かれているという目新らしさがある。[8]　黒人のミラー医師はアンクルトムのような虐げられた奴隷ではない。オリヴィア夫婦とジャネット夫婦の関係は白人と黒人という社会的垣根を取り除いてみれば対等であろうし、カータレット少佐とミラー医師を経済という観点からみれば、一方は没落し妻の財産に頼る白人であり、もう一方は白人の屋敷をも買い取れる財力のある父を持つ気鋭の黒人医師となり、黒人のほうが白人よりも上にあるという設定になっている。しかもミラー医師はヨーロッパ留学も果たしたエリートで、病院を所有し、黒人女性のための看護婦養成学校をも運営しており、黒人の将来にも目を向けた社会的視野の広い人物である。前作の *The House Behind the Ceders* においても、チェスナットは八分の一黒人の血をひくジョン・ワーウィック（John Warwick）を成功した弁護士として描いている。 しかし、この成功はパッシングに成功した白人としての偽りのアイデンティティーに基づくものであり、*The Marrow of Tradition* におけるミラー医師のような成功した中流階級の黒人像ではない。

このような新しい黒人像を描きえた背景には作者自身の先に述べたような社会的成功による自信、自己信頼が見て取れよう。しかし、この物語が今から百年も昔のアメリカの南部を舞台にした同時代小説であることを考慮すれば、このような設定自体が特殊を超えて過激であるとも言えるであろう。黒人のミラー医師は白人のカータレットよりもエリートであり、財力もある。黒人の作者がこのような新しい黒人像を描いたところで、ほとんどが白人である当時の読者層、しかも、作者自身この小説の対象は白人を想定しているという状況では、従来のイメージを打ち破る新しい黒人像を提出されても白人読者がこれを受け入れるかどうか疑問である。

以上述べたように、この小説は、白人と黒人の対照のみならず、新旧世代間の対照も取り入れられているために、登場人物が多くなり、各人物像がス

テレオタイプ化されているという批判を受けることになる。[9] しかし、このタイプ化はおそらく先に述べた作者のこの小説執筆の明確な意図と深く結び付いているとも考えられる。すなわち、典型的な登場人物を配置し、明快なプロット運びで明確に物語を構成して人種問題の所在を明らかにしようとする意図である。その意図はある程度実現されていると言えよう。しかし、重要なのは、ステレオタイプ化された黒人像を描いている一方で、旧来の白人作者によるステレオタイプ化された黒人像、もしくは、白人から押し付けられた役割を担うだけの黒人像を作者がうち崩し、新しい黒人像を提出している点である。当然のこととして、白人読者層からの反発は想像に難くない。

ステレオタイプの登場人物と単純明快な物語の運び、それに現実とは遊離したような新しい黒人像の提示、このような要素によって、この小説は寓意物語的な雰囲気を獲得しているとも言える。 しかし、そのような絵空事としてこの物語を片付けることができない要素がこの小説には持ち込まれている。これもまた作者の意図に基づくものであるが、当時の社会状況がリアルに描かれ、この小説は解説付きの時事ドキュメンタリーとしての性格をも併せもつことになったのである。[10] このようなドキュメンタリー的手法が用いられている一例は黒人の選挙権を制限しようとする白人側の動きを解説する箇所にみることができる。

> The campaign [for the restriction of the suffrage] was fought on the color line. Many white Republicans, deluded with the hope that by the elimination of the negro vote their party might receive accessions from the Democratic ranks, went over to the white party. By fraud in one place, by terrorism in another, and everywhere by the resistless moral force of the united whites, the negroes were reduced to the apathy of despair, their few white allies demoralized, and the amendment adopted by a large majority. The negroes were taught that this is a white man's country, and that the sooner they made up their minds to this fact, the better for all concerned. The white people would be good to them so long as they behaved themselves and kept their place. As theoretical equals, –practical equality being forever out of the

> question, either by nature or by law, –there could have been nothing but strife between them, in which the weaker party would invariably have suffered most. (*MT*, 240-41)

ここでは作者が意図した人種問題の所在を明らかにし、その不満を提示するという意図は明確に実現されていると言えよう。発表から百年近くを経た現在の読者にとってはこのような解説は作品の背景を知る上で役立つが、しかし、その一方で、果たしてこの解説が物語と有機的に連動し作品の質を高めていると言えるかどうかに関しては大いに疑問が残る。少なくとも物語の流れは２～３ページに及ぶ解説によって中断されてしまう。発表当時にはこの小説を「目的小説」[11]と称している批評が見受けられるが、これはある意味では作者の意図が作品として結実したことの証だと言えるかもしれない。しかし、目的小説というラベルを貼られてしまうことによって、しかも、再建期を過ぎ、黒人側にとっては時代の流れが逆行していた状況下で、あえてその流れを押しとどめようとする目的をもったこの小説は、かえって白人の読者を失ってしまったことであろう。そのことを証明するかのごとく、黒人嫌いや差別を助長するような小説、たとえば、ディクソン（Thomas Dixon）の *The Leopard's Spots* (1902) や *The Clansman* (1905) がセンセーショナルな成功を収め、多数の読者を得たのである。[12]　一方、黒人作家であるチェスナットが人種問題の所在を明白に指摘し、それを突きつけてくる小説は、ノスタルジックな南部農園ものや方言を多用したほら話風の作品を彼の短編に求めた白人読者層には居心地の悪いものであったろう。それ以上に、問題が自分の方にあることを指摘されてそれを素直に受け入れられるほど白人読者層は寛容ではありえなかったのである。人々の意識が公民権運動へと向かうにはまだ半世紀以上もの時を必要としていたのである。

白人女性作家による『アンクルトムの小屋』が世論を奴隷解放に導いたとする通説はあまりにも有名であり、チェスナットも自分の作品が『アンクルトムの小屋』のように白人の倫理観や良心に訴えて、波紋を呼ぶことを夢見ていたのである。[13]　最後の場面でのジャネット夫妻の決断がその作者の意図を明確に示している。

チェスナットは最終場面を三度書き直している。つまり、作者には三つの選択肢があったわけである。[14] 1900年の日付のある二つの草稿では、黒人の医師ミラーは白人の子の命を救う。そして、第一の草稿では、ミラー医師は、その子の父、つまり、カータレットと友となる。カータレットはミラーに町に住む限り彼を保護すると申し出る。しかし、ミラーはそれを拒否し、彼に人間としての権利を要求する。第二の草稿では、ミラーは白人社会から迎え入れられることになるが、自らジム・クロー・カーに乗って町を去る。現行の結末は、息子を救えるのはあなただけだというカータレットの懇願をミラー医師は最初は断わる。しかし、オリヴィアの再度の懇願に、その決断をジャネットに委ねる。ジャネットはオリヴィアに対し、黒人であるがゆえに、妹として認めてもらえず、辛酸をなめ尽くした人生を歩まねばならなかったことをひとしきり述べたあとで、「ある女がこれまでどれほど悪し様に扱われて来ようとも、共感する心をもっていることを知るでしょう、その女を傷つけてきた人に対してさえも。」（*MT*, 329）と言って、苦渋の選択の果てに、夫がオリヴィアの息子のもとに行くことを許す。猶予する時間はないが、子供はまだかろうじて命を留めているというオープン・エンディングで小説は終わり、読者はおそらく、ミラーはその子を救うことができるであろうと想像することとなる。ピケンズはこのような結末の変遷に黒人にとっては悪化する一方であった社会的状況のもとで、チェスナットの現実認識の厳しさが増したのだとみているが、第一草稿、第二草稿に比べ、むしろ最終稿のほうが絶望の果てに一条の光明が射し込んでくるという感傷的で曖昧な結末になっている。問題が先送りされているという意味では現実認識が増したとも言えようが、それよりもむしろ、自分の息子を殺された黒人夫婦がその原因となった白人夫妻の子の救済を決意するという結末への変更は、黒人側の自己犠牲的愛による救済が強調されることとなり、白人読者たちに道徳的目覚めを訴えるという作者の意図はより明確に表出されることとなった。「彼[チェスナット]のメッセージは人種的寛容（racial tolerance）である。」という批評は的を射た批評であろう。[15] しかし、白人との平等の権利を主張し要求する黒人側からみる人種的寛容と、それを恐れる白人側からみる人種的寛容との間には、この小説が、そしてこの小説の結末がその間隙を埋める

にはあまりにも大きな隔たりがあったのである。

結び

結果的には、この作品は作者が期待したほどの成功も収めず、白人の人種問題に対する道徳的意識をも覚醒するには至らなかった。皮肉にもチェスナットは小説の前半でミラーにこう言わせている。

> "We shall come up . . . slowly and painfully, perhaps, but we shall win our way. If our race had made as much progress everywhere as they have made in Wellington the problem would be well on the way toward solution."
>
> (*MT*, 51)

このように先進的なウェリントンですら人種問題の解決に向かうどころか、白人種によって人種暴動が引き起こされたのである。しかも、それは現実に起こった暴動に題材を得ているのである。ましてや超保守的な深南部諸州での厳しい現実は想像に難くない。それでもチェスナットは非暴力に基づく倫理的な人種問題解決の方策を作品のうえで模索したのである。しかし、黒人種がキング牧師に導かれ非暴力を貫き、マスメディアという媒体を通し多くの国民の関心を集め、人種問題解決のためにアメリカ政府自体が動き、黒人種が少なくとも表面的ではあっても本当の意味での公民権を勝ち得るにはまだ半世紀以上もの時を必要としたのである。同じように、チェスナットの小説が脚光を浴び、彼がアフリカ系アメリカ人の文学的先達として認知されるようになるまでにはまだ半世紀以上もの長い道のりを要したのである。*The Marrow of Tradition* は作者の意図が明確に具現化されたがゆえに、小説としてはいくつかの欠点をもつこととなったが、しかし、この小説が受け入れられず、チェスナットが筆を折ることとなったのは、小説としての欠点が原因であるというよりもむしろチェスナットが、そしてこの小説が、あまりにも時代を先取りし過ぎていたからだと考えるのが妥当であろう。

注

1 Joseph Blotner, *Faulkner: A Biography* (New York: Random House, 1974), vol. 2, 1138.

2 チェスナットに関する伝記的事実および年代については以下の書物を参照した。
William L. Andrews, *The Literary Career of Charles W. Chesnutt* (Baton Rouge and London: Louisiana State University Press, 1980).
Ladell Payne, *Black Novelists and the Southern Literary Tradition*, (Athens, Ga.: The University of Georgia Press, 1981).
Sylvia Lyons Render, *Charles W. Chesnutt*, Twayne's United States Authors Series 373, ed. David J. Nordon (Boston: Twayne Publishers, A Division of G. K. Hall & Co., 1980).
Charles Duncan, *The Absent Man: The Narrative Craft of Charles W. Chesnutt* (Athens, Ohio: Ohio University Press, 1998).

3 Richard H. Brodhead ed., *The Journals of Charles W. Chesnutt* (Durham and London: Duke University Press, 1993), 154. 以下この書物について言及する場合は *Journals* と略記し、ページ数とともに丸括弧を付し本文中に記す。

4 Joseph R. McElrath, Jr., and Robert C. Leitz, III eds., *"To Be an Author": Letters of Charles W. Chesnutt* (Princeton: Princeton University Press, 1997), 153. 以下この書物について言及する場合は *Letters* と略記し、ページ数とともに丸括弧を付し本文中に記す。

5 Charles W. Chesnutt, *The Marrow of Tradition* (Ann Arbor Paperbacks: The University of Michigan Press, 1990, orig. pub. 1901). 以下この書物について言及する場合は *MT* と略記し、ページ数とともに 丸括弧を付し本文中に記す。

6 Charles W. Chesnutt, *The House Behind the Ceders*, *Early Modern African American Writers* vol. 3, selected and with an introduction by Bruce Kellner, (Tokyo: Hon-No-Tomosha, 1997, orig. pub. 1900), 34.

7 このエピソードはMark Twain の *Puddn' head Wilson* (1894)でのTom Driscoll が変装して殺人を犯すのを意識したものであろう。

8 Sylvia Lyons Render, *Charles W. Chesnutt*, 52.

9 たとえば、次の書評を参照。
"Like most books written with a purpose, its characters are types, not people. None of the excitement is really thrilling because it is too stock." Kansas City (Missouri) *Star* (8 December, 1901) cited in *Charles W. Chesnutt: A Reference Guide*, eds. Curtis W. Ellison and E. W. Metcalf, Jr. (Boston: G.K. Hall & Co., 1977), 50.

10 実際、つぎのような当時の書評がある。
"This timely story is as much a political document as a novel."
Boston *Globe* (9 November, 1901), cited in *A Reference Guide*, 46.

11 *Nation*, 74（20, March, 1902), 232, cited in *A Reference Guide*, 54.

12 *The Marrow of Tradition* は1901年に3,276冊、02年に111冊売れたが、その後３年間は一冊も売れなかった。一方、*The Leopard's Spots* は初年度だけで105,000冊の売れ行きをみている。*Letters of Charles W. Chesnutt*, 172参照。

13 ロンドンでの書評はまさにチェスナットの意図を汲んだものである。
"This book deals with the great skeleton in the American closet. It is an able exposition of the problem and a fair portrayal of things in the south. It is hoped that this book will produce an effect like that of Mrs. Stowe's [*Uncle Tom's Cabin*]."
London *Inquirer* (28 December, 1901), cited in *A Reference Guide*, 50.

14 Chesnutt, Journal, 9 September, 1900, Charles W. Chesnutt Collection, cited in Ernestine Williams Pickens, *Charles W. Chesnutt and the Progressive Movement* (New York: Pace University Press, 1994), 85.

15 L. Payne, *Black Novelists and the Southern Literary Tradition*, 25.

Charles W. Chesnutt and the South at the Turn of the Century: A Study of *The Marrow of Tradition*

Hisao NAKAMURA

Key words: Chesnutt, the South, racial problems

Born into free colored family a few years before the Civil War and educated in the Reconstruction South, Charles Waddell Chesnutt (1858-1932) became a successful lawyer and stenographer. But his dream was to be an author. He realized the dream; "The Goophered Grapevine" was published in *Atlantic Monthly* in 1885, and he was the first African-American writer to appear in such a quality magazine. His short stories, collected in *The Conjure Woman* (1899) and *The Wife of His Youth and Other Stories of the Color Line* (1899), were welcomed by the white reading public nostalgically remembering the antebellum South. However, his novels, *The House Behind the Ceders* (1900) and *The Marrow of Tradition* (1901), did not sell well, and he gave up writing fiction after *The*

Colonel's Dream (1905). It was not until after the 1960s that he was rediscovered and reevaluated as the first African-American novelist of importance. This paper is intended to show why he brought an end to his literary career, through analyzing *The Marrow of Tradition.*

The novel deals with a race riot in North Carolina in 1898. This riot was led by Negrophobic demagogues. As the riot shows, the South at the turn of the century saw the movements against civil rights by those who were afraid of "Negro domination." Chesnutt's intention was "to sketch in vivid though simple lines the whole race situation" and to indicate "the seat of the complaint." His strategy was to use stock characters and a simple melodramatic story to allow white people to clearly understand the racial problem. However, what is important is that the author is not on the side of the stereotypical black characters who play the roles given by white people, or who are too radical to solve the racial problem. Neither is he on the side of radical white people who advocate violence. He is on the side of the new type of black characters, such as Dr. Miller, an elite doctor of middle class and his wife Janet, an octoroon. They are tolerant enough to save the life of a white boy whose father is the leader of the riot in which their only son was killed. The author's proposal is racial tolerance as a remedy for the problem.

This novel was labeled a "purpose novel." This criticism is to demonstrate that the novel succeeded in realizing the author's intention. It is true that the novel has some faults, such as its unfortunate combination of fiction and documentary. Yet, it is still exciting and moving. The unsuccessfulness of the novel did not come from its faults, but from the rejection of the white reading public who could not accept the black author's proposal. As his letter states, it is difficult for a black novelist to write race problem books because "it is white people they are aimed at." In other words, Chesnutt and his novels appeared too much ahead of their time to be fairly estimated.